

<見失った（迷い出た）羊のたとえ話> ～わたしは良い羊飼いです～

（マタイ 18・12 - 14、ルカ 15・4 - 7）

・人生に迷いは付きもので、一人ひとりに“迷子”になる時があります。“迷子”とは普通、親とはぐれてしまう子どものことを指しますが、大人も人生設計に迷ったり、人と接する際の言動ひとつを取ってみただけでも迷いが生じたりしますし、また、残念ながら間違いを犯すこともあるので、すべての人が当てはまると言えるのです。すべての人は“迷子”になる時が必ずあるといっても過言ではありません。

・今回取り上げるたとえ話は“迷子になった羊”についての話です。このたとえ話をするので、イエス様は自分の言葉を聞く人に“迷子”であることを自覚させて、「親である神さまは迷っているあなたをいつも探し、見つけ出して下さる」ということを教えています。

・マタイとルカによる福音書に並行箇所があります。ただし、マタイでは「迷い出た羊」、ルカでは「見失った羊」となっており、異なる視点から“迷子”となっている姿と、その迷子を見つけて出して下さる“良い羊飼い”である神さまの姿を浮き彫りにしています。

1、マタイによる福音書から（18・12-14）

・マタイによる福音書ではイエス様が話をしている相手は使徒たち（弟子たち）となっています。「あなた方はどう思うか」と諭すように話を切り出しています。18章のはじめに「心を入れ替えて子どもようにならなければ決して天の国に入ることはできない」と教えていることから、そんな子どもの一人がいなくなることを神さまは望んでいないという思いが伝わってきます。

・「迷い出た」とあるので羊が自分でどこかに行ってしまったという意味になります。羊飼いの見ていないあいだにどこかに行っているのが、普通なら勝手に迷ってどこかで怪我をしたとしてもその羊のせいです。でも、迷って出て行ってしまった羊を羊飼いは見捨てずに探しまわるのです。たとえ自分勝手に出て行ったとしても。

・マタイが「迷い出た」という表現で伝えたいことは、自分のもとから離れていったとしても、自分の子どもである人類一人ひとりの迷っている姿から目を背けず、探し回るといふ神さまの姿なのです。

・わたしたちは子どもたちが良い選択をすることができたら「よくできたね」と褒めます。でも、間違ってしまった時はどのような対応をしているのでしょうか。確かに間違いは間違い、悪いことは悪いこと。でも、そのことに気づき（子どもなりに親の教育を受けて）、もとのところに戻って来た時に喜んで迎え入れているのでしょうか。このたとえ話が教えていることは、わたしたちが子どもたちを正しく生きるように導くことと同時に、間違いを犯してしまったとしても、探し当てて喜んで迎え入れなければならないという姿勢なのです。

2、ルカによる福音書から（18・12-14）

・ルカによる福音書ではイエス様が話をしている相手はファリサイ派の人々や律法学者たちとなっています。彼らはイスラエルの人々の宗教的・民族的リーダーとしてイスラエル民族（ユダヤ人）を導いていた人たちで、イエス様が徴税人や罪びとたちと食事をしていると不平を言っていたのを耳にして、このたとえを話しているのです。徴税人や罪びとたちは社会からさげすまれ、寄り添ってくれることを求めている人々です（ローマ帝国のために税金を取り立てる仕事をする人、罪に定められ、社会から見捨てられた人など）。

・「見失った」とあるので、離れていった羊よりもむしろ羊飼いが責任を感じていることが伝わってきます。そうすると、神さまはご自分を責めていることとなります。「大切な羊を見失ってしまった」と。だからこそ、見つけ出した際に6節で「一緒に喜んで下さい」、7節で「大きな喜びが天にある」と言っているのです。見失っていたからこそ、羊飼いである神さまにとって羊を見つけて、連れ戻した喜びはとてつもなく大きいのです。

・ファリサイ派の人々や律法学者たちは、本来“迷子”を探して見つけ出す、それこそ神さまの姿に倣う人たちなので、イエス様は「あなたたちはなぜ一緒に喜んでくれないのか」と疑問を投げかけているのです。見つかって帰って来た（自分の帰るところに戻ってきた）人について喜ぶことができないのは神さまがもっとも悲しむことなので、どうして神さまと一緒に喜ぶことができないのかと指摘しているということです。わたしたちも戻ってきた人のこと、また戻ることのできた自分のことを喜ぶことのできる、そんな存在になりたいものです。

・見失った羊を探し回る神さまの姿を、キリスト教徒は十字架上の傷だらけのイエス様の姿と重ね合わせます。神さまはわたしたち“迷子”のために無傷では済まないところを探し回るからです。イエス様が十字架を背負われたのはこの神さまの姿を伝えるために他ならないので、わたしたちは神さまの決意の表れとして十字架を掲げ、仰ぐのです。

★“迷子”とは誰かから探されている存在です。わたしたち自身が自分のことを“迷子”だと自覚することができれば、神さまから探されていることが分かるし、また探し当てられた時にどれほど喜んで下さるかが分かります。そして、この体験は神さまと、すべての人と喜びを共有することにつながります。

★わたしたちの間で喜びを連鎖させなければなりません。それは“迷子”を見つけた時の神さまの思いそのものです。離れた、迷い出たとしても、神さまからすれば見失った存在であるわたしたち。見つけられた喜びがすべての人と分かち合う喜びとなりますように。その喜びに触れることで人として、神さまの子どもとして、より成長することができますように。